

Savicz-Ljubitzkaja, L. I. & Z. N. Smirnova, 1970. The Handbook of the Mosses of the USSR. pp. 287-510.

* * * *

8) Lazarenko (1970) は南ソ連より単型属 *Usmania* を、新種 *U. campylopoda* とともにセンボンゴケ科の属として記載した。だがこの種は、1) 朔柄が短かく、朔は葉の間に埋れているが8対16本の朔歯がある、2) 帽子は僧帽状だが、基部は4-5裂している、3) 葉身は不規則に2層になる、4) 中肋には背腹どちらの *stereid band* もないなど、他のセンボンゴケ科の種にはほとんど見られない特徴を多くもっている。これらの諸形質をそなえたものは、ギボウシゴケ科 (*Grimmiaceae*) のギボウシゴケ属 (*Grimmia*) にみられる。この *U. campylopoda* は、ギボウシゴケ属の一種とするのが適当であろう。

9) ニューヨーク植物園に所蔵されている *Hymenostylium aurantiacum* (= *Gymnostomum aurantiacum*) および *Molendoa roylei* の標本中に、これら兩種とは全体の大きさ、葉形、中肋の内部構造および造卵器のつき方などの点で異なるものがあったので、新種 *Gymnostomum chenii* として記載した。イシバイゴケ属 (*Molendoa*) とハナシゴケ属 (*Gymnostomum*) とは造卵器のつき方の差によって区別されているが、他の形質にはほとんど差はない。イシバイゴケ属で造卵器が短い側枝の先に生じることは、Meusel (1935) が述べたように、茎の先端に造卵器を生じるもの (ハナシゴケ属) の “*die kalktuffbildenden Formen*” への集斂現象と考えられる。特に *G. chenii* と *M. roylei* は造卵器のつき方の差の他には全く相違点がなく、兩種をハナシゴケ属よりイシバイゴケ属への移行段階にある種とみなすこともできよう。

□前川文夫：日本人と植物 岩波新書，pp. 193, 1973年2月，¥180。植物の名は歴史的、地域的に拡散、収斂し、その間に変形を繰り返えし、また内容が別物と入れ替ったりして、今日では全く意味の取れなくなっているものも多い。この書では分散して僅かに残っている小さな諸証拠を総合し、組織化して、その植物が認識され利用された日本の古い時代の物の見方、習俗にまで溯って、植物和名の原義を求めようというユニークな努力がなされている。その意味でこれは語源論であるばかりでなくて、植物を媒体とする日本文化史論という一面が強い。著者の文化への広い理解に支えられたこの論集は肩がこらず興味深く読まれる。語源論はとかく独断におちいり易い危険を伴うが、この書では広い基盤に立った議論を随筆風に展開しながら、なお世の広い読者層の関心に訴えてその批評をまつという姿勢をとっている。 (津山 尚)